

津幡町議会 2014年 3月議会 一般質問

- 1) 「ないものねだり」から「あるもの探し」へ
- 2) 町農業公社の設立も視野に、
学校給食と地元農家をつなぐ農業振興を
- 3) 農業公園構想は誰の発案によるもので、
誰が必要としているのか
- 4) プールの温水をどう確保するのか、
温水プール基本構想の見直しを

※答弁については2014年5月半ばごろには津幡町のホームページ等の
議会会議録で見ることができます。

1) 「ないものねだり」から「あるもの探し」へ

最初の質問、「ないものねだり」から「あるもの探し」へは、今日の一般質問のすべてに関係することなのでよろしくお願いします。

国の借金は1000兆円を超え、少子高齢化の波が襲っています。日本社会のこれからは、開発の結果、次世代に多額の借金を残していくというやり方ではもう限界、終わらせるべきではないか。今ある巨額の借金が「ないものねだり」の結果だったとまでは言いませんが、これからは「ないものねだり」ではなく「あるもの探し」「あるものを活かす」という転換が行政に求められているのではないかと考え、質問します。

「ないものねだり」から「あるもの探しへ」という言葉は、吉本哲郎氏や結城登美雄氏が、もう20年近く前に提唱した「地元学」に基づく言葉です。

吉本さんは1990年代に熊本県水俣市役所環境課の課長として町の再生に尽力し、現在、地元学を提唱、活動している人です。吉本さんの「地元学」の背景には水俣病の問題があります。彼の言う「地元学」とは、地元の豊かさに気づくための手段であり、陳情に見られるような「ないものねだり」から地域にあ

る資源を探す「あるもの探し」へ。グチから自治へ。「地域という扉を開けて、あれがない、これがないと文句を言うのは二流。地域の資源をうまく料理するのが一流。これを黙ってやるのは超一流。あるものを組み合わせ、イメージする力が大切」とおっしゃっています。

結城さんは民俗研究家です。かれがこれまでに歩いた農村は800以上。いたずらに格差を嘆き、都市とくらべて「ないものねだり」の愚痴をこぼすより、この土地を楽しく生きるための「あるもの探し」。それをひそかに「地元学」と呼んでいます。数ヶ月前、わたしは結城さんのお話を直接聞く機会がありました。「これからの家族の生き方、暮らし方、そして地域のありようを、その土地を生きてきた人びとから学びたい」という結城さんのお話の中で、印象に残ったひとつに、長野県の人口わずか2980人の小さな村、小川村がありました。小川村には6つの「おやき村」があるそうで。「おやき村」というのは、おやきを作って焼いている小屋みたいなものなのですが、その工房が中学校から歩いて15分のところにある。近所のはあさんたちが歩いて行ける距離のところ。入社資格は65歳以上で定年はありません。65人のおばあさんたちがおやきを作って働いています。おやきに使う野菜は地元農家から調達し、年間売上はいくらかというと、7億5000万円もあるそうです。定年はないのに、ある時、そこで働くおばあさんたち3人が辞めさせてくれとやってきたそうです。「預金通帳をみたら1200万円もたまっちゃった。このままでは使わないで死ぬような気がするから、使うためにやめようと思う」と言ってきたそうです。これは「ないものねだり」から「あるもの探し」に発想を転換し、今あるものの魅力に気づき、それを活かして経済的価値を生み出すという一例です。

津幡町をみれば、最近では県立看護大と連携しての「興津創造の会」や開店したばかりの中山の、民家を活用したマコモ料理店など、これらは住民主体の「あるもの探し」といえます。津幡町はといえば、先人が知恵と工夫を駆使して残してきた美しい風土があり、交通の要所であり、長い間培われてきた財産があるはずで、津幡ならばこそ、これを指針とすべきではないか。町長の見解を問います。

いま、知事選まっただなかです。4日前、3月1日付の北陸中日新聞に、石川県知事選の「候補者の横顔」と題して3人の候補者を紹介する記事がありました。その中で最近感動した本は何かという質問に対して、2人の候補者がまったく同じ本を上げていました。谷本正憲候補と木村吉伸候補の二人が同時に感動したと言っていた本。何という本だと思いますか。それはなにかというと藻谷浩介さんの「里山資本主義」という本です。多額のお金をかけてまちづく

りをするよりも、今眠っている資産を活用すべきだ。先人が守り育ててきた里山が大きな資産だということです。高度成長期の考え方は時代遅れだということです。「ないものねだり」から「あるもの探し」は、谷本候補と木村候補、知事選候補の二人が感動したという「里山資本主義」と相呼応するものだと考えます。なお、わたしはどちらかの候補者を応援しているとかという話では全くないということをひとこと断っておかなければならないかなと。選挙期間中ですので。

では、このような観点から給食の地産地消、農業公園、温水プールの3項目にわたって質問していきます。

2) 町農業公社の設立も視野に、学校給食と地元農家をつなぐ農業振興を

町内にかぎらずですが兼業農家の多くに見られるように、農業経営はむずかしく、担い手の高齢化も進み、耕作放棄地も増えています。しかしもし農業で収入が得られれば農業は生業として成り立ち継続可能となり、農業振興に寄与することになります。

町には学校給食があります。そこで町行政が給食の地産地消への方針をはっきりと打ち出すことができれば、農家と食と学校とが繋がって、農業振興、地域の活性化、食育にもなるのではないかと考え、質問します。まず学校給食の現状についての質問です。

給食での石川県及び町の地場産物を使用している割合は何%か。

小中学校の給食費の総額はいくらか。

給食食材の調達事情はどのようなか。

そして4月からの消費税が8%になりますが、給食費はどうなるのか。聞きます。

次に、学校給食に地産地消を本格的に進めることを提案したいのです。給食の食材を地元で得ること。町で生産された農作物を販売・消費できるように、学校給食に積極的に地元産を取り入れられないだろうか。

昨年(2013年)4月、大阪府箕面市は学校給食に地元食材を活用すべく、農業振興課が窓口となり市農業公社を立ち上げました。(市農業委員会事務局内に組織)。この農業公社の役割は、近所の農家の生産物を一手に引き受けて学校につなぐ受注発注が業務です。一体どのようなことをするかというと、まず「学

校給食に食材を提供していただける農家さん募集」の呼びかけをします。学校給食に使う年間の野菜や米の量を月別、項目別に紹介し、何月には何キロのジャガイモを使っているとか、ニンジンはどうだとか、玉ねぎはどうだとか、給食でよくつかわれる食材を表示します。表にない食材でも、農家からのこんな食材はどうかという相談にも応じ「農地でどんどん作っていただきましたら、全て買い取らせていただきます。」というのが農業公社の方針です。

その主な流れを説明しますと、まず、農家の登録を随時受け付けます。そして給食で使う1カ月前に供給見込みの確認を行います。次に給食使用1週間前に各農家へ発注量の再確認をし、出荷前日に最終確認、給食当日朝に農家が直接学校に出荷する。そして農業公社は農家に購入費を振り込むというのが主な流れです。何らかの理由で万が一出荷できないとか、不足が生じても食材業者等から調達するのでご安心をと呼びかけています。また手持ちのコンテナや段ボール箱で持ち込むだけなので、袋詰めや表示ラベルを貼る作業も不要。流通規格外の不揃い野菜も可能。少量でも可能です。

ー昨年、2012年9月、箕面市の小学校給食の野菜の地産地消率は箕面産0%、大阪産0.5%だったのが、昨年、2013年4月に「箕面市農業公社」を設立して半年後の9月には、中学校給食の場合、野菜の地産地消率は箕面産だけで16%になり、今年（2014年）1月には22%に、さらに増え続けています。公社の存在は当然ですが、全面協力してくれた農家さんのおかげもあるということで、現在39件の登録農家から食材の提供を受けています。

箕面市農業公社は、学校給食を通して地元から食材を購入することで、食育と農業振興と地域活性化を可能としました。

そして農業公社の役割にはもう一つ、大きな役割があります。耕作放棄地をあずかって学校給食農場として活用しています。

このような取り組みは、将来的には学校給食のみならず、町内の保育園、福祉施設・病院等の食材提供にもつながるだろうと思われます。

どのようにすればこのようなことが実現可能か。箕面市の例をみると農業公社を立ち上げたことが大きいと思います。農業公社というと農地保有合理化事業等に関わるものが主なものと考えられますが、箕面市農業公社の場合、その主な役割は、学校給食に食材を提供してくれる農家からその食材を直接購入して、給食を通じて、農家と学校とをつなぐことにあります。それがひいては農業振興、地域の活性化、食育となっています。津幡町もこのような役割を持つ町農業公社を農業委員会と連携して立ち上げられないか。もちろんJA石川かほく等との連携も重要になります。農地の遊休化を食い止め、町で生産された

農産物を販売・消費できるように学校給食に積極的に地元産を取り入れていくために、津幡町も農業公社を設立できないでしょうか。地産地食をスローガンに掲げる矢田町長の見解を求めます。

箕面市の“農業×給食プロジェクト”は、学校の栄養士さんたちの知恵と努力によって「先に献立を作って必要な食材を発注する」のではなく、「来月に生産される食材から献立を構築する」という、献立作りの大逆転もあるそうです。

箕面市の倉田市長、39歳の若き市長さんがいうには、地元の農業支援だからといってわざわざ高く買わなくても、市場と同じ調達価格でも農業への還元率は上がり、つまり市場と同じ対価で同じ量が調達できる。

スタートは上々で、この仕組みがうまくまわっていけば、保護者からの学校給食費が、ダイレクトに近所の田畑を守り育てていくことになり、子どもたちの目の前には、学校の帰り道におっちゃんが耕してるような、リアルな、近所で育った野菜が、給食室で調理されて並ぶ。たくさんの方が紡いだ連鎖の果てに、毎日、自分たちの口に食べ物が入る。子どもたちは、きっと何かを感じ、何かを学んでくれると思うといっています。これは「あるもの探し」と言えるのではないのでしょうか。

まず箕面市農業公社は協力農家からの登録を随時受け付ける →給食で使う1カ月前に供給見込みの確認を行う →給食使用1週間前に各農家へ発注量の再確認をする →給食当日に農家が出荷→箕面市農業公社は農家に購入費を振り込む
--

3) 農業公園構想は誰の発案によるもので、誰が必要としているのか

2006年（H18年）に公表された第4次津幡町総合計画の中には、農業公園構想はありません。第4次には丘陵公園の建設計画が掲載され、温泉利用施設などの交流施設や武道館、健康づくり施設などのスポーツ・健康増進施設を集め、町民が生きがいと豊かさを実感できる総合公園として整備を図るとありました。しかしこの計画は実行されず、今は「里山の保全を主体とした町民の憩いの場、交通の利便を最大限に活用した公園にしたい」ということですが、いまだ丘陵公園をどのように活用するかは具体的には決まっていません。用地買収が始まったのは1997年（H9年）からです。現在はほぼ買収が終了したようですが、その用地取得に14億円余りが投入されており、この17年間

塩漬け状態となっています。14億円というと、津幡町の一般会計年間予算の10%を超える金額です。この丘陵公園を頓挫させたまま、新たに農業公園をしかもこれから工期17年間かけてつくるとはいかがなものかと考えます。

農業公園について町民からは、必要な公園なのか？誰が農業公園を必要としているのかという声が多く聞かれます。そこでですね、改めて伺いますが、そもそも、農業公園構想はどのようにして生まれ、誰が考え、誰が必要としているのでしょうか。

また農業公園にモミジ山がなくてはならないとされた経緯について。どのような審議を経てモミジ山は無くてはならないとされたのか。この構想に反対の声はなかったのか。

町長は高さ1.5mのモミジの苗が十数年間で見ごろになるとおっしゃっていますが、わたしにはとてもそのように思われません。モミジ山が町長の言うメジャー観光地となるには何年かかるのですか。

現在の予定地である倶利伽羅地区の山林が最適地であるということですが、予定地は標高90m余りの山林です。農業をするために、そして公園を作るために、これから道路を新たに作り、山林を開墾・開拓することから始めなければなりません。その開発費用も考えての最適地なのか疑問です。農業公園は箱もの建設とどこが違うのかという思いを持たざるを得ません。町にとって本当に必要不可欠なものならば、たとえ建設費の9割が町の借金と国からの補助金であったとしても作らなければならないと思います。しかし農業公園はそれに値するのでしょうか。17年間かかるという財政上の理由を、納得できるように説明できますか。

そして完成までに17年間かかるのであれば、今から約20年後に完成ということになり、そのときまで、あるいは完成後も矢田町長が首長として携わるかどうかは不透明です。任期中に完成させることができないかもしれず、次の世代にも荷物になるかもしれないような計画を実行することに対してその責任の重さを、町長はどのように考えているのか。

町は5年後には黒字と見込んでいますが、もし収益が上がらず赤字経営となった場合、町が赤字分を補てんしての財政負担を負わなければいけない。そういうことについても町民に対して説明しなければならないのではないのか。説明もないのは無責任な事業計画といえるのではないのか。説明会やシンポジウム開催等を再三要求しているのに、開かないとは、その開かない理由は何ですか。

今後設置するという推進協議会は、町民への説明とは別物です。町民の声を聞くことなく、町民のコンセンサスを得たといえるのですか。

町長選挙時の公約には農業公園はありませんでした。たしか、かほく湯に水辺公園が公約にあったはずですが。水辺公園が農業公園に変更されたのでしょうか。

昨年12月議会の一般質問の答弁で、町長はもみじ山が景観地としての成功している事例として、3か所あげています。京都の東福寺、東京都調布市の東京神代植物園、新潟県長岡市のもみじ園の3か所です。

(町長 12月議会の町長の答弁)

*もみじ山が景観地として成功している事例はあるのかということですが、すけれども、例えば東福寺に代表される京都の多数の寺社仏閣では、紅葉の時期に大勢の観光客が紅葉を見るためにやってくることは有名かと思えます。また、東京都調布市の東京神代植物園や新潟県長岡市のもみじ園なども、紅葉の時期にはもみじを目玉にして集客していると聞いております。

国宝級の歴史あるモミジ庭園等を引き合いに出して、農業公園のもみじ山の必要性の根拠とするのは、「ないものねだり」ではないか。農業公園計画に関する検討委員会を設置すべきではないか。今からあらゆるデメリットを引っ張り出して考えなければならないのではないか。

.....

東福寺

臨済宗東福寺派大本山の寺院。山号を慧日山(えにちざん)と号する。本尊は釈迦如来、開基(創立者)は、九条道家、開山(初代住職)は聖一国師円爾(しょういちこくしえんに)。方丈の「八相の庭」や、紅葉の美しい寺として知られ、宋から伝わった「通天モミジ」と呼ばれる三葉楓など、楓の木が多数植えられ、晩秋には多くの人で賑わう。「東福寺」の名は、最大の寺院である東大寺、最も隆盛を極めた興福寺、2つの奈良の寺院から一文字ずつもらってつけられたもの。三門、塔頭・龍吟庵の方丈は国宝に指定され、多くの建造物や絵画、書籍が重要文化財に指定されている。境内に紅葉が多い理由とは元は桜の名所として知られた地であったが、将軍足利義持が画僧・吉山明兆に望みを問うたところ、「金銭的な望みはないが、境内に多くの桜を植えると後世に遊興の場になるため、それを禁じて欲しい」と言っ

たため、義持が桜の木を切ったとの話が伝えられている。桜は約 600 年前に伐採され、代わりに楓の木が植えられたという。絶景を楽しむ通天台方丈の中にある縁側からせり出たバルコニーのような場所は「通天台」と呼ばれ、この場所から見る通天橋や紅葉の風景は絶景といわれる。通天台は太閤秀吉が修理した通天橋を江戸時代に移築したもので、すべて木製なのが特徴。

神代植物公園

東京都調布市にある東京都立の植物公園。都立としては唯一の植物公園である。園内には約 4,500 種類、10 万株の植物が植えられている。梅や桜の名所としても知られるが、都内最大で 274 品種 5,100 株を誇るバラ園では春と秋にバラフェスタが開催され、夜のライトアップやコンサートなどさまざまなイベントが催される。

新潟長岡市のモミジ園

もみじ園は、明治 29 年頃神谷の大地主、高橋家の別荘の庭園としてつくられたもの。約 4 千平方メートルの敷地内には、樹齢 150～200 年のもみじや山桜、カエデ類、ツツジなど多くの植物が植えられている。最も多く植えられているイロハカエデは、北から九州地方の太平洋側に野生するモミジの一種で、高橋家が事業の活動の場であった京都から優れた品種を移植したものである。

.....

4) プールの温水をどう確保するのか、温水プール基本構想の見直しを

2 月の全員協議会で、初めて室内温水プール基本構想が示されました。その中で候補地を抽出する際の条件に、温水をどう確保するのかという項目がありませんでした。温水をどのように確保するかは、プールの維持管理、運営に大きく影響するのは明白で、候補地の選定条件として必要不可欠な項目なはずです。温水の確保について全く考慮しないで適地を選定することは、おかしいのではないかと、無効ではないかと思えます。

基本構想では中央公園と運動公園内の 2 か所の候補地が有力で、この 2 つの候補地をもとに基本計画の策定に取り組むという全協での説明でしたが、温水をどう確保するのかを踏まえたうえでの基本構想でなければならないのではないか。候補地も含め、基本構想の見直しも必要ではないか。

また温水の確保について、どのようなやり方があると町は想定しているのか。温水の確保について問います。